



TITLE:

静脩 Vol. 37 No. 2 (2000.8) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 37 No. 2 (2000.8) [全文]. 静脩 2000, 37(2)

ISSUE DATE:

2000-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66035>

RIGHT:



豊かな人間社会の構築に貢献することを目指して

附属図書館長 佐々木 丞平

京都大学附属図書館は1899年（明治32年）の設立以来、昨年11月で創立百周年を迎えた。その間、建物は三度建て替えられ、バックナンバーセンターの開設、CD-ROMサービスやオンラインによるカタログ検索システムであるOPACの運用等を開始する一方、閲覧席を増設し、付設設備を充実させるなど、様々な努力が積み重ねられた。それと共に新たに宇治キャンパスに宇治分館も設置される等、新たなニーズに対応して今日に至っている。

2000年の現在、計82万冊（京都大学全体で574万冊）の蔵書や、電子図書館システムの画像データを資料として提供し、資料保存のための目配りと、また利用者にとって利用しやすいシステム、機能を常に考え、更には52の学内の図書館（室）間の相互協力や連携の調整機能を担っている。

本附属図書館は、総務課、情報管理課、情報サービス課、合計10掛の60名に近い職員が、こうした情報管理、サービスに取り組んでいる。今まで図書館を利用するだけの立場であった私にとっては、図書館がこのように様々な分野の方達の大変な努力によって機能していることを知り、驚きに近いものを感じているのであるが、まず多くの利用される皆様にもこのことを理解

していただきたいと考えている。これらの課が力を合わせ、うまく機能して初めて利用者にとってより使いやすく、意義のある教育研究の支援体制ができるのであり、一同一丸となって努力していきたいと考えている。

当館は、時代と共に必要とされる情報の分野や、質、量が刻々と変化して行くことに対応をしていく一方、貴重な記録物を保管管理するという重要な役目も担っている。

また近年、図書館のあり方として模索されていることの一つに、学内への情報提供のみならず、広く外部へのサービス提供という問題がある。外部への貢献に関しても検討していかなくはならない。これは一方では学術の発展に貢献するという意味で大変意義深いことであるが、一方では部外者の侵入による事件も発生しており、様々な事項を検討して慎重に進めて行かねばならないことである。

さて、現在のように有り余る情報が収集できる時代になると、今までには想定されていなかった新しい種類の問題が浮上してくる。その第一点は情報の整合性と質である。テレビのニュ



ースのように一刻も早く、より多くの情報を提供しようと性急になる余り、中には誤報やニュースの違う情報伝達も起きている。

一つの情報が大変な時間をかけて伝達される時代から、瞬時の情報収集伝達が可能になったことは誠にありがたいことである。しかしこのように、急ぐあまりに情報確認をなおざりにするような、基本的確認事項の不徹底という、従来は手抜きをされなかった部分が却って希薄になるという不安が生じている。

発展する情報収集網とデータ量の拡大は、良い面を持つ一方、玉石混淆の情報から正しい情報を選択し淘汰しなければならないという、情報を必要とする側にとっては、以前よりも却って手間のかかる事態が起きていることもまた事実である。そしてこの情報淘汰の時に、情報を必要とする側の篩にかける力量そのものが問われる時代になっており、このこともまた、万人が整合性のある情報を手に入れられるわけでは無いという問題を含んでいる。

時代が変化することによって、このように情報収集、伝達、情報選択、という流れの中に含まれる問題点は刻々と変化をしている。私自身は絵画史の研究に身を置き、古文書の和綴の手書き本や版本類を解読し、一方では、何十万件という絵画作品の資料をデータベース化してコンピュータで制御している。極めて古い情報入手法と現代的な検索との両面が私の研究分野の範疇にあるが、その両方がうまく機能して初めて私の研究分野は成り立っている。恐らく多かれ少なかれ図書やデータ検索による情報取得をする場合、新旧両面がどの研究分野においても必要なものといってよいであろう。

特に私の研究分野では古いものを扱うため、古文書の登場は頻繁であるが、ここで奇妙なことに気付かされた。古文書の記述というのは極めてシンプルで素っ気ないものであるが、それが書かれた当時においては詳細に説明を付せずとも理解されるものであったからであろう。しかし、現代において研究をする立場としては、

その一行一句に様々な事項を想定し、考察をすすめるなくてはならない。誠に手の掛かるものであるが、この過程で研究のヒントになる事柄を知り得たり、研究を進める方向を見定めることができたりもし、少ない情報ながら、それを生かした研究が構築されていく。

一方、最新のデータベースは大変に機能的になってはいるものの、目的物だけの検索が起こるため、寄り道も迷い道も無い。あるものを探そうとして少しでもそれと異なれば、「無い」という事実が帰ってきて、実は探していたものと極めて近いものがあったとしても情報として入手できない場合がある。どう違っているのか、それを最初から仮定できていれば、そのような検索もできるであろうが、そのアイデアの無いときには、ほんの少しの差異であっても、その差異までを含めて検索を掛けることはなかなか難しい。

シンプルな一行から手探りであれやこれやと調べていく過程と、様々な調べたい事項を一端検索に掛けてしまえば、豊富な情報の中から抽出されて出てくる便利な方法と、一体どちらが良いのか。情報を取得する側がよくよく考えてみないことには、遠回りな道も、行き止まりの道も、様々に内包されているわけである。早いことがイコール早く理解できるということにはならない落とし穴も生じている。

最新の電子技術の発達には大いに期待を寄せている者ではあるが、一方で、このような最新のシステムの盲点に関しても細心の注意を払うことが必要になってくるであろう。情報管理収集のモラルという問題もある。

また、こうした最新システムの生む歪みとして、最近マスコミを賑わしている問題に少年犯罪がある。テレビゲームで育った年齢層の抱える問題として、感情を持たないコンピュータを相手のやりとりしか人生経験がない少年が増えているようである。対人間であれば、自分の提示した問題が相手に不利益や不快な感情を与えるものであれば、当然それに対するリアクショ

ンが返ってくる。あるいは、相手を喜ばすことを提示すれば当然それに対する相手の好意的な対応が返ってくる。

しかし、感情を持たない機械であるテレビゲームを相手にしている世代、コンピュータ相手のやりとりしか経験しない状態では、相手からのリアクションを読むという経験の蓄積が希薄になる。相手を傷つけようが、不利益を与えようが、自身で気付くこともできない。情報提供という合理的な一面と共に、こうした人間教育、育成の上で持つ最新システムの問題点についてもこれからは活発な論議と研究が必要になってくるであろう。

人類が情報に振り回されるのではなく、豊かな人間社会の構築に役立ってこそ、情報の役割が達成できるのである。多様化する情報に対し、どのように提供サービスを対応させていくか、急激な情報技術革命にどのように対応していくか、また他の諸機関に対し、図書館がどのように連関して機能していくのか、これから未来に向けて構築すべきことは山積みである。豊かな人間社会の構築、そして教育研究の支援を目指し、京都大学附属図書館は邁進していきたいと願っており、広く皆様のご協力ご支援をお願いする次第である。

(ささき じょうへい)

附属図書館宇治分館の設置にあたって

宇治分館長 杉 浦 幸 雄

宇治地区の五研究所共通図書室が「国立大学の附属図書館に置く分館を定める訓令」の一部改正により、4月1日付けで附属図書館宇治分館として新たにスタートした。

本学では、「調整された分散方式」のもとに附属図書館と51におよぶ図書室から構成されていると聞いている。大学図書館が中央集中方式をとるか、分散方式をとるかは、議論の分かれるところであるが、宇治地区の五研究所共通図書室（化学研究所、エネルギー理工学研究所、木質科学研究所、食糧科学研究所、防災研究所）の歴史を見ると、30年前に宇治キャンパスに集まる自然科学系の各研究所が有機的に連携し研究支援となる五研究所の共通図書室を創設し集中方式をとっている。当時の考えは、本学にとって先駆的な出来事であり、高く評価されている。この当時のことを本誌附属図書館報「静脩」Vol.8, No.4 (1972.2)の巻頭文で当時の葛西善三郎食糧科学研究所教授は、「一昨年、研究所が宇治地区へ移転することになり、五研究所でこれらの雑誌が同じ図書館に保管、陳列されることになったのを機に、かなりの整理が行われた。

重複をさけ、無駄をはぶき、それぞれの研究所が独自の特色のあるものを分担して重点的に揃えることになった。経費は節約され、利用は効率的になり、保管は合理化された。新着雑誌がズラリと並べられているのは壮観である。」と五研究所共通図書室のことを評価されている。

このように先駆けて集中方式をとった五研究所共通図書室も本年で30年の節目を迎え、新しい世紀を目前に五研究所共通図書室から発展移行するため、本学では初めて文部省訓令に定める分館として制定していただいた次第である。

附属図書館宇治分館としてスタートしたが、運営にはきびしいものがある。本学では分散方式が長く続いているため、図書室の運営は部局で賄うことが伝統になっている。宇治キャンパスには自然科学系の各部局（化学研究所、エネルギー理工学研究所、木質科学研究所、食糧科学研究所、防災研究所、宙空電波科学研究セン



ター、工学研究科の一部、エネルギー科学研究科の一部、情報学研究科の一部)の教職員・大学院生が、日本を支える重要な基盤となる科学技術の進展を図り、国内はもちろん世界に開かれた情報発信基地としての役割を果たすことを目指して最先端の研究を行っているが、独立した図書館さえないのが現状である。五研究所の共通経費で賄ってきた部局図書室とは異なり、宇治キャンパスにおける訓令施設として研究支援の活動をしていくには、全学的な観点からの経済的支援がなければ成り立っていかない。

今日の社会情勢の変化により、行財政の見直しが大きく取り上げられ、国立大学の独立行政法人化や大学評価機関の第三者評価が話題となり、組織自体の見直しなど求められている状況のなかで、附属図書館宇治分館は本学における大学図書館の在り方のモデルとして注目されている。

本学において従来のような調整された分散方式がいつまでも継続できるとは考えられない。なぜならば、現在の部局図書室で抱えられてい

る予算、人員、資料の充実度、サービス機能、施設等の問題において部局で解決することは困難である。部局で解決できたとしても本学での総合性が発揮できるとは考えられない。分散方式の図書室が連携なしに個々に運営されては行き詰まって、ネットワーク時代に取り残されてしまうのではないかと考えられるからである。

今、京都大学図書館に求められているのは、京都大学の教育・研究に対してキャンパス別あるいは機能別に大胆に図書室を再編成することではないだろうか。こうした意味で先駆けとなった附属図書館宇治分館を成功裏に導けば、次への展望が大きく開けてくるであろう。21世紀に向けて、国際的な情報発信基地としての図書館機能の充実を積極的にはかってゆきたいと考えており、今後、宇治分館図書館・資料館の建設などに対し、全学的な観点から支援をお願いしたい。

(すぎうら ゆきお)

2000年京都電子図書館国際会議について

平成12年11月13日から16日にかけて、京都大学附属図書館で「2000年京都電子図書館国際会議：研究と実際」2000 KYOTO INTERNATIONAL CONFERENCE ON DIGITAL LIBRARIES : RESEARCH AND PRACTICEが開かれます。主催は京都大学、BL(英国図書館)、NSF(全米科学財団)で、情報処理学会、電子情報通信学会、日本図書館協会、情報科学技術協会、ACM JAPAN、ACM SIGMOD JAPAN、AEARU(東アジア研究大学連合)、APRU(アジア環太平洋大学連合)、京都市などの後援で行われます。

ネットワークで必要な情報が入手出来る電子図書館は、現在、学校、職場、家庭でだれにでも使いやすくするために、さらに充実した機能の実現をめざして、世界各地で研究開発が行われています。ヨーロッパではグーテンベルグ生

誕600年を記念したプロジェクトがあり、アメリカの電子図書館プロジェクトは第2期に入り広範な研究開発が行われつつあります。京都大学図書館では世界に先駆けて電子図書館を実現し、いま建設中の国立国会図書館関西館に電子図書館が準備されています。このような背景から電子図書館国際会議を京都で開催することになったものです。この会議では、日本、アメリカ、ヨーロッパの最先端技術の研究者と図書館関係者が集まり、双方の立場から研究発表が行われます。

会議はセッションIからセッションVIIまであり、11月13日午後から14日にかけて日本語で「電子図書館の現状と将来」「国際会議基調報告」、15日は英語と日本語によるコンピュータ関係メーカーから電子図書館技術の動向紹介と

英語による国際会議特別セッション、16日から 語の基調講演は通訳がつけられる予定です。プ
17日は英語による国際会議となっています。英 ログラムの内容は下記のようになっています。

11月13日(月) 13:00 - 17:45 附属図書館3階AVホール

セッションI オープニング(日本語)

基調講演:「情報技術の発展と図書館機能の拡大」(京都大学総長:長尾真)

基調講演:「電子図書館システムの将来:ウェブとデータベースの利用」(京都大学:上林彌彦教授)

セッションII 電子図書館の概観(日本語)

内外電子図書館の概観(図書館情報大学:杉本重雄教授)

国立国会図書館における電子図書館構想(国立国会図書館:小寺正一総務部企画課電子図書館推進室主査)

英国図書館における電子図書館(英国図書館:リチャード・ローマン)通訳付き

国立情報学研究所における電子図書館(国立情報学研究所:安達淳教授)

東京工業大学における電子図書館(東京工業大学附属図書館:大埜浩一事務部長)

筑波大学における電子図書館(筑波大学附属図書館:小西和信情報システム課長)

11月14日(火) 9:00 - 17:00

セッションIII 電子図書館の実際(日本語)

京都大学における電子図書館(京都大学附属図書館:磯谷峰夫電子情報掛長)

国立情報学研究所における著作権処理(国立情報学研究所:酒井清彦コンテンツ課課長補佐)

神戸大学「震災文庫」の電子化と著作権(神戸大学附属図書館:稲葉洋子企画係長)

セッションIV 電子図書館の未来(日本語)

電子図書館政策の今後(文部省学術情報課:濱田幸夫図書館係長)

発信型学術情報コンソーシアム(東北大学附属図書館:済賀宣昭事務部長)

大学図書館と電子図書館の未来(九州大学:有川節夫附属図書館長)

セッションV English programのセッションI(英語)

基調講演:マルチメディア電子図書館とインターフェース(京都大学総長:長尾真)

Multimedia Digital Library and the Interface(全米科学財団:Michael Lesk)

図書館、博物館とアーカイブ:文化的知識の保持と供給のための協調(GMDドイツ:Erich Neuhold)

Libraries, Museums and Archives: Working together to maintain and provide cultural knowledge

(英国図書館長:John Ashworth)

11月15日(水) 午前(日本語) 午後(英語)

セッションVI 電子図書館の技術の動向

マルチメディア情報と電子図書館(リコー) 今後の電子図書館(富士通) 絵巻物の復元について(日立) 電子透かしの技術動向と活用事例(凸版印刷) 最新のOCRシステム動向とその未来(東芝) 予定。

セッションVII 特別セッション

図書館員とCS研究者双方の課題:知的所有権(慶応義塾大学 HUMIプロジェクトなど)

11月16日(木)~17日(金) 日英米オーストリア等のCS研究者を中心とした英語による国際会議

外国語雑誌目次データベース(Swet Scan)を有効に使いませんか!

便利な機能を使って研究成果を

はじめに

附属図書館では、昨年からオランダのスエッツ社の外国語目次データベース(SwetScan)を導入し、「京都大学電子図書館システム」で提供しています。

約14,000タイトルの外国語雑誌目次データベースですので、使いようによってはかなり便利に学術情報を得ることが出来るでしょう。以下、データベースの内容と、使い方を説明します。

1. データベースの内容について

スエッツ社は日本の丸善、紀伊国屋のように、図書館を対象に代理店の業務も行っていますが、世界中の図書館を顧客としています。

利用できるデータは自然科学系の雑誌が多く、人文社会系の雑誌は30%となっています。30%といっても約4,200タイトルですから、主要な雑誌はかなり網羅されています。

通常目を通されている雑誌以外に、思いがけない雑誌から有用な学術情報を得られるかも知れません。

雑誌の到着とのタイムラグは、一部の雑誌を除き1週間ほどデータベースの方が早いようです。現在、1998年1月のデータから、毎日データを累積していますが、近い内に1997年のデータも追加する予定です。

2. 一般的な検索

学内のパソコンからは、24時間いつでも検索が出来ます。「京都大学電子図書館システム」のホームページから、右上の黄色い「学内専用サービス」ボタン(図1)をクリックしてください。電子ジャーナルや各種CD-ROMと一緒に「目次データベース」が並んでいます。(図2)そこをクリックし、さらに「SwetScan」(図3)をクリックします。ここで一般的な検索とSDIと呼ばれる検索の登録に分かれます。(図4)すぐに検索されたい時は、「検索画面へ」

をクリックをしてください。(図5)この画面では、論題、著者名、雑誌名、ISSN(雑誌番号)などの検索が出来ます。論理演算(and or not)、前方一致検索(Biolog*のようにします)等が可能です。必要な項目に入力をして「検索実行」をクリックします。検索結果が出てきますので、必要な雑誌論文を選んで、目次のダウンロードやプリントアウトが出来ます。それらを論文を書く際の引用文献リストにも利用できます。(引用文献リストを作るのに便利なソフトウェアが市販されています。)

所蔵確認は後で説明します。

3. SDI機能

SDI機能とは、常に追いつめたい論題、著者名、雑誌名、ISSN(雑誌番号)などをあらかじめ登録しておく方法です。週次をクリックしますと、毎週日曜日に自動検索を行い、合致する論文があれば月曜日の朝に、あなたにE-mailの形で配送されます。

(図4)で事前登録が必要ですので、「SDI利用申請方法」をクリックし、利用登録を済ませてください。申し込まれますと、附属図書館からIDとパスワードをお知らせします。登録終了後「SDI画面へ」(図6)をクリックしIDとパスワードの入力をします。(図7)そして「認証(LOGIN)」をクリックしますと検索式を入力する画面になりますので、一般的な検索と同じように入力をしてください。週次か月次を指定します。これで、あなたのメールアドレスに定期的に入手したい雑誌や論題、著者の目次が届くことになります。

4. OPAC(オンライン目録)との連携

このシステムは、検索結果を見てOPACにより京都大学にその雑誌が所蔵されているかが分かるようになっています。あなたの所属しているキャンパスに無い雑誌については、その場で

複写申し込みが出来る機能を現在検討しています。それが実現すれば、もっと便利に利用できるでしょう。

なお、更に詳しい利用法を知りたい方は(図4) SwetScan利用の手引きをクリックしてみてください。

図1



図2



図3

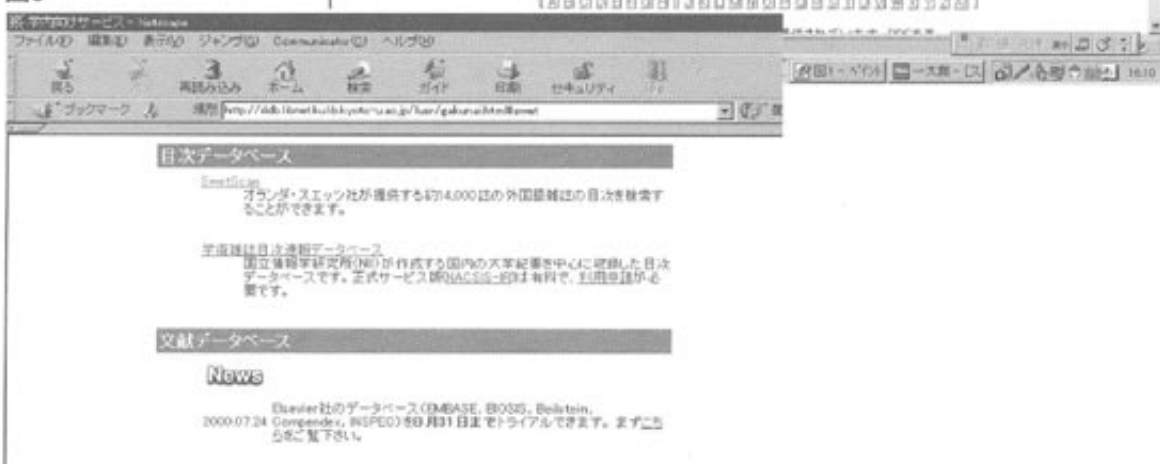


図4



図5



図6



図7



京都大学図書館百年

京大草創期の司書たち

廣庭基介

はじめに

筆者が京大の図書系の職場に就職したのは昭和23年(1948)のことで、その頃の図書館員の養成は、明治以来の徒弟制度そのもので、筆者は文学部図書室において、谷口寛一郎室長から欧文タイプライターの打ち方を始め、ラベル貼付の位置、蔵書印捺印のこつ、書物が天地逆に置かれているのを見ても平気な人間は図書館員ではない、などと微に入り細を穿つ指導を受けた。大正7年に京大附属図書館に就職した谷口司書の手をとり、足をとって指導したのが、これから述べる笹岡民次郎司書であった。

1. 笹岡民次郎篇(以後、個人の敬称を略し、年表記は和暦とする)

当然どこの図書館にも第一号の館員が存在する。京大では明治30年7月14日、大学創設準備の真っ最中に東京からやってきた当時26才の青年であった笹岡民次郎が第一号司書であった。笹岡司書は明治3年生まれで、小学校を出た後は上級学校へ進学することなく、いろいろの個人や私塾で、主として英語を勉強しながら、明治22年3月、満18才の時、東京図書館(後の帝国図書館)に月給12円の雇として就職した。明治27年6月に東京美術学校(今の東京芸大)文庫掛に配置転換されたが、この間にもアルバイトに当時の有名な受験ツールともなっていた『日本英学新誌』『中外英字新聞・研究余禄』の編集補助やAsiatic Society of Japanの事務に精を出した。明治29年7月には仙台の第二高等学校への配転を命じられ、9月13日には雇から書記(8級俸給与:年俸240円の判任官)への昇格が告げられた。

一方、京都に第二の帝国大学を設ける計画が公然と出たのは、明治28年12月の第9回帝国議会に創設予算案が提出された時と思われ、続いて明治29年1月14日の衆議院予算委員会において、京大が創設された場合の医科大学の設置場所が討議されたことであろう。

同じ明治29年10月29日付けで笹岡は懲戒免職

となっている。ひと月前に雇から正式の官吏への第一歩となる書記に昇任したばかりであるにもかかわらず、この仕儀である。これは筆者の全くの推測であるが、東京図書館から美術学校文庫掛の最初の掛員となり、次に第二高等学校に配転を命じられたことは、彼が洋書の整理に強かったゆえのシフトで、京大の創設がほぼ決定しそうな感触を得た彼は、仙台より京都への赴任を要請したのではなかったか、と思うのである。

彼は英語に相当の自信をもっており、第二の帝国大学でも洋書目録の需要は火を見るより明らかである所からの判断ではなかったか。そして、彼は免職から約9カ月後の明治30年7月14日付けで、「任京都帝国大学書記、8級俸給与」の辞令を手にしたのである。これより4年後の明治34年8月30日付けの文部省総務局人事課長から木下総長宛の通達によれば、閣議決定において「待遇官吏又八雇員ニシテ懲戒又八懲罰ニヨリ免職又八解雇セラレタル者ハ2年ヲ経過スルニ非サレハ官吏・待遇官吏ニハ勿論、雇員ニモ採用スルコトヲ得ス」とあるのを見ても、笹岡の免職後の措置は寛大に過ぎると見えるのであるが、当局も笹岡の図書館向きの英語力は認めていたのではなからうか。

図書館業務とは離れるが、笹岡は明治34年に『京都大学一覧』英訳の功績により、賞金60円、明治35年にも同じ英訳に賞金100円を給与されている。彼の英語力が高く評価されていたのである。図書館が開館するまでは、笹岡は事務局庶務課に席をおき、木下総長の主張である京大図書館の市民公開の意を含めた圖書の寄贈依頼状作成や、来るべき開館に備えて、もろもろの準備作業に大忙しの毎日であったと思われる。明治32年4月に将来、附属図書館長に補す含みで附属図書館創設事務を委嘱された島文次郎が着任するまでの1年9カ月間は、笹岡一人で頑張っていたのであった。

京大図書館員の大先輩としての笹岡のもう一

つ忘れてならない事蹟は、彼が図書館関係の協会や学会に逸速く加盟し、図書館学関係雑誌や書誌学関係雑誌に論文、訳文、評論、随筆などを寄稿したことである。最も早くは明治33年2月4日に、館長・島文次郎、同僚司書・秋間玖磨と共に関西文庫協会を創設したことである。

大正4年に『図書館雑誌』の8月号、12月号、翌年の7月号に『図書及び印刷用語(A-G)』付録16ページと、“Origins of personal names(A-E)”付録9ページを公表、以後、青年図書館員聯盟の『図書館研究』、市販の書誌学雑誌『書物礼讃』、同じく雑誌『書物の趣味』その他に執筆を続け、昭和5年に退官した後も、囑託として同11年まで附属図書館で大司書として勤務した。学歴の関係からか、司書官には昇り得なかったが、高等官待遇となり、当時のわが国の図書館界では、京大の図書館に笹岡ありと知らない人はなかったらしく、図書館学関係、英文学関係の雑誌や著書に彼の名前が出てくることがある。

笹岡が最後に住んでいたのは左京区田中里の前町74番地で、昭和16年の夏頃に亡くなったらしい。趣味は釣竿の収集、稀覯書の収集であった。

因みに、笹岡の一番の弟子は大正7年に附属図書館に就職した谷口寛一郎で、谷口は戦前に附属図書館の洋書目録掛長になり、昭和18年一旦退職、北京の華北調査研究所資料処図書館(元燕京大学図書館)主任司書に転出、引き揚げ後、京大文学部図書室主任、その間、IFEL(教育指導者講習会図書館学の部)のロバートL.ギトラー教授のクラスに、附属図書館の佐々木乾三司書と共に参加し、戦前・戦後を通じて、文部省主催の図書館専門職員講習会で洋書目録の講師を務めた。退官後、橘女子大図書課長、京大アメリカ研究センター図書室、附属図書館雑誌室でパート職員と、元気な間は一貫して図書館で働き抜いて昭和63年1月88才で他界した。

2. 湯浅吉郎(号:半月) 篇

草創期の京大図書館司書として、湯浅吉郎を選ぶことには違和感をもたれる向きもあるかもしれない。島文次郎や秋間玖磨、山岡亮三郎、狩野直喜などの方が京大にとっては相応しく、湯浅は京都府立図書館長、同志社マンとして有

名ではないか、という意見もあると思う。しかし、島文次郎については、『静情』の創立百年記念増刊号に書かせて頂いたので、一応済みということになった。秋間玖磨については筆者自身が今一つ調査が不足していること、山岡亮三郎は、附属図書館よりも法科大学図書室の司書として活躍しており、筆者の調査も不足。狩野直喜は文科大学創設までの腰掛け勤務であって、図書館員としてよりも、東方文化学院京都研究所(後の人文科学研究所)の初代所長、東洋学の碩学として重要な人であるため、図書館の先人とするには躊躇する、などで、ここでは短期間しか本館には勤務しなかったけれども、わが国の図書館人としては、渡米して、有名なメルビル・デューイに師事するなど、ユニークな点において、忘れられてはならない湯浅を取り上げることとした。

湯浅は安政5年、群馬県安中で味噌醤油醸造業の有田屋を経営する父・次郎吉と母・茂世の第4子に生まれた。湯浅は人間形成の上で、兄・治郎の指導と影響を深く受けたのであった。明治5年、兄は福沢諭吉に傾倒し、その全著作を読み、社会教育の必要性を痛感し、自家の前に画期的な私設図書館・便覧舎を開設した。治郎22才、吉郎14才の時のことで、私財を挙げて3,000冊の本と机、椅子、書架を揃え、一般に公開したという。新刊書、新聞、雑誌、某米国人から寄贈を受けた絵入り雑誌、和漢の古書を提供した。湯浅自身、自分が渡米して図書館学を学び、京都府立図書館長となり、日本最初期の児童室を設けたり、後に東京に移って早稲田大学図書館と関係をもったことなどは、すべてこの兄と便覧舎に胚胎している、と語っている。

吉郎は明治7年、安中の先輩・新島襄がアメリカから帰国して故郷に寄り、土産話の講演会を催した時の群衆の中にいた。以後、新島に心服し、20才にして同志社に入学、8年後の明治18年6月に卒業すると、9月にはオセアニック号に乗船してアメリカ留学に向かった。イリノイ州ノースウエスタン大学に入学して、英文学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語を修めた。明治21年になるとオハイオ州オベリン大学神学科

の全科を卒業して神学士となる。次にエール大学の博言科に入り、東洋古代語学を専修し、且つシェークスピアの劇詩を研究。明治24年6月にはエール大学においてヘブライ文学に就いての英文215ページの論文を提出してPh.Dを受けた。9月には帰国して結婚、直ちに同志社神学校教授に就任し、英文学、国文学、ヘブライ文学、旧約聖書文学を講義した。明治32年、同志社を退社して京都平安教会牧師となる。翌年から盛んに新体詩を作る一方で波多野流平家琵琶に打ち込み、免許取得。平家琵琶の形から号を半月にしたという。

明治34年7月、京都帝国大学の木下総長に招かれて、法科大学講師の地位で附属図書館に勤務し、目録と分類を担当した。すべての問題に合理的な説明を求める体質の法科大学が、どのような説明でこの人事を認めたのか、真実は不明であるが、筆者の推測を述べるならば、明治32年9月の法科大学開講に向けて、多くの教授就任予定者がドイツなどに留学して、専門書の選択・購入・発送を鋭意行った結果、この時期には京大へ送られてきた法科用洋書が山積して、附属図書館の整理能力を越えて滞貨となり、法科大学から図書館への事務進捗方の催促が続いていたので、木下総長は島館長とも相談の上、アメリカ帰りでドイツ語も修めたという湯浅を、法科大学向けの図書整理要員として招き、図書館に席を置かせて、法科大学の洋書(ドイツ書)の整理に当たらせたのではなかろうか。或いは、湯浅がヘブライ文学研究によってエール大学の博士号を取得していることに鑑み、法制史研究上に彼のヘブライ語やドイツ語の知識が役立つことを期待したのではなかろうか。明治35年2月11日、彼は祇園の平野屋で開かれた京大法科大学の親睦会(有信会の前身・法科大学会)の席上、『モーゼの法律』と題して講演を行ったことが『京都日出新聞』2月13日号に報じられている。湯浅はこの期間にも同志社女子部においてシェークスピアから国文までの講師をも勤めていた。

明治35年5月には、島図書館長らと発起して「銀峰会」を創立した。この会は「文学美術に対し趣味を有する者相集まり、毎月1回談話若し

くは講演会を開く」というものであった。

同年8月には、京都帝国大学と京都市より「海外滞在中図書館に関する事項の研究」を囑託され、再び渡米の途に上った。10月、シカゴ大学の図書館員養成学校に入学し、メルビル・デュイから図書館学の指導を受けたアレン・ディクソンの下で6カ月学んで、その全科を修め、『日本図書館史』と題した英文の論文が好成績を得たが、『整理技術』の科目では芳しくない成績であったという。翌明治36年4月、オルバニー(ニュー・ヨーク州)の図書館学校で直接メルビル・デュイの指導を暫時受けた後、エール大学時代の恩師で、シカゴ大学総長になっていたウィリアム・ハーバー博士の紹介状をもって、米国東部諸州の公共図書館、大学図書館、美術館、博物館を視察して廻った。5月には英国に渡り、しばらく大英博物館図書部(現在の英国図書館)においてロンドンの図書館事業を視察し、次いで6月にはパリに入り、ビブリオテーク・ナショナルとルーブル美術館を見学、同月下旬にはドイツ入りし、ベルリンの王国図書館、ライプツヒの商品陳列場などを視察した。

8月に帰国すると、10月には京都高等工芸学校(後に京都工繊大)講師に就任した。そして翌・明治37年4月1日、京都府知事大森鐘一に請われて府立図書館長に就任し、同時に同志社図書館委員にも就任した。その双方の図書館向けにデュイのDC分類を基礎とした分類表を編纂している。

明治42年には待望の府立図書館新館屋が完成したが、これは当時のわが国では最新の設備を誇るもので、特に貧困家庭(このような表現は現在是不適切極まりないが、明治末年の彼自身の言葉)の学齢前の幼児を対象とした児童閲覧室を公開したのであった。

一方、湯浅自身が著名な新体詩の作詩者であり、彼の新体詩集『十二の石塚』は現在も文学史上に明記されており、故郷・安中市にはそれを彫った石碑が建っている。また、同志社の三ツ葉のクローバーを図案化した校章は、明治26年に湯浅が国土と三位一体(智育・徳育・体

育)を象徴としてデザインしたものといわれている。

湯浅自身の芸術愛好の傾向と、当時の京都に良い美術館が無かったこともあって、明治45年4月の2週間、府立図書館の3階陳列室を中心にして「白樺美術展」が開催された。主として西洋画の複製や版画を展示したものであったが、有島武郎は『白樺』の明治45年5月号に、湯浅が非常な好意をもって協力してくれたことを感謝する旨、明記している。『白樺』創刊者の一人、志賀直哉も彼の『京都通信』の中で、湯浅を始めとする館員の熱心な協力を、筆を究めて褒めている。

大正元年には正統派を自認する画家達から俗流として蔑視されていた竹久夢二の個展を図書館で開催して、同じ時期に向かいの公会堂で開かれていた文展よりも多くの観覧者を集めたという逸話が残っている。(この個展は湯浅が辞任した後の大正7年にも第2回を同館で開催している。)

大正5年、湯浅は大森知事の退任と同時に図書館長を辞任するが、同年5月5日、彼の内外の図書館事情に精通した経歴を生かすべく、早稲田大学から図書館顧問に招聘され、市島謙吉館長、毛利宮彦司書などと共に同図書館の新館建築の設計に当たったのであった。しかし、大正

7年12月に新大学令が公布されたために、計画に食い違いが生じ、計画自体が停止されてしまった。その後、坪内逍遙、市島謙吉(春城)など早稲田大学首脳の依頼を受けて、俳優図書館(別名:演劇図書館)設立準備に奔走する傍ら、海洋図書館の計画にも参画して、その調査のために三度目の渡米を果たしたのであるが、大正12年9月の関東大震災により、これらすべてが画餅に終わってしまった。この挫折の連続は湯浅の氣力を相当衰えさせたに違いない。以後、経済的にも不遇が続き、東京、大阪、また東京と、兄治郎の家や、未亡人になっていた次女の家に移る生活が続いた。晩年の10年間は専ら旧約聖書の正文の訳出に励む一方、『箴言』『ヨブ記』『詩篇』『伝道之書・雅歌』『第二イザヤ』『イザヤ書』と次々に出版し続けた。昭和13年2月4日、東京中野区上高田の自宅の2階から階段を踏み外して転落したことが基で86才の図書館とヘブライ学に捧げた生涯を終わったのである。

中川正己筆『明治の文化人湯浅半月1～3』(『京都府立総合資料館だより』No.117～No.119:1998年10月～1999年4月)を参考にさせていただいた。(ひろにわ もとすけ:元附属図書館職員 現花園大学助教授)

アメリカ大学図書館の旅 ハーバード大学

附属図書館情報サービス課参考調査掛 後藤慶太

1. はじめに

私は、2000年2月27日から2週間、「平成12年度京都大学後援会助成金第1類第1種(海外派遣)」を得て、アメリカの大学図書館に研修に行く機会を与えられました。また、研修期間の後半では、日本語資料を担当している北米のライブラリアン達の研究会議に参加し、本学電子図書館について発表するという機会にも恵まれました。本稿では、最初に訪問したハーバード大学についてご紹介します。

2. ハーバード大学

<http://www.harvard.edu/>

マサチューセッツ湾大植民地最上級役員会の票決により1636年に新しく設立された大学は、初代の寄贈者であるJohn Harvardに因んでハーバード大学と命名されました。1638年に没したHarvardは、自分の図書室と財産の半分をこの新しい大学に残しました。以来、350年以上の歴史と伝統を誇るこの大学は、90以上の図書館を持ち、1,300万冊にのぼる膨大な資料を所蔵しています。(Harvardが寄贈した図書は1冊を残してすべて火事で焼けてしまったそうです。残りの1冊とは、ある学生がこっそり持ち出していた本でした。学生はその本をカレッジの学長に差し出しました。学長は、厚くお礼

を述べた後、許可なく本を持ち出した罪により学生を退学させたという伝説があるそうです。)ハーバード大学ではイェンチン図書館の日本語資料担当のライブラリアン、マクヴェイ山田久仁子さんに全面的にお世話になりました。紙面を借りてお礼申し上げます。



ハーバード大学キャンパス

イェンチン図書館

<http://hcl.harvard.edu/harvard-yenching/>
東アジアコレクションでは全米屈指の図書館です。およそ100万冊の蔵書のうち日本語資料は25万冊ほどで、全米で3本の指に入るそうです。しかし、中国語資料はその倍の50万冊を越えており、貴重書についても、中国人キュレーターの活躍により漢籍が充実しているということで、東アジアとは言え、中国書が主要な部分を占めています。このことは訪問した他の図書館などを見ても言えることと思います。貴重書は未整理のものも多く、その中から元代の拓本が発見されたり、夏目漱石が英文で書き込んだ本が見つかったりと、今後、整理が進むのが楽しみです。

分類は、1997年まではイェンチン分類という独自（とは言っても、他大学の東アジア図書館等でも使われています）の分類法が取られていましたが、現在は米国議会図書館の分類（LCC）によっています。山田さんは、NACSIS Webcat (<http://webcat.nacsis.ac.jp/>) が公開されたことを高く評価され、国立国会図書館が目録を公開してくれることを望みます、とおっしゃっておられました。（この話を聞いていたわけではないでしょうけど、国会図書館の目録はほどなく公開されるようになりました。

<http://webopac2.ndl.go.jp/>)

Social Sciences Program

<http://data.fas.harvard.edu/ssp/>

ここは、環境に関する資料、政府刊行物、地図、マイクロフィルムなどを収集している図書館で、次にご紹介するラモント図書館と同じ建物内にあります。政府刊行物についてはその保存図書館という機能を果たしており、それらを必要とするすべての人に対して公開された図書館なのです。ここでは、レファレンス部門の長であるAmy Kautzmanさんにご説明いただきました。

さすがにマイクロフィルムを扱う館だけに何十台というマイクロリーダーが設置してあり壮観な眺めでした。リーダーの調子について伺ったところ、最新の物を除き故障がちで、毎朝のように「ベッタン、ベッタン」している（故障中のはり紙をしている）そうです。何処も同じと苦笑してしまいました。それから1冊の本を見せていただきました。それは1790年の国勢調査でした。ところが昨年分の国勢調査は一つの壁面が埋まるほどの量で、この国の発展ぶりがこのような側面からも窺えるのでした。

マイクロフィルムの所在を調べるにはカード目録を利用していましたが、最近はCD-ROMに切り替わっています。現物にたどり着くにはまずCD-ROMを検索するということです。CD-ROMは3万枚あるということですが、この枚数は検索性のもの以外に、市販品のCD-ROMなども含まれるのでしょうか。また一部のソフトウェアのためにWindows3.1のような旧システム用端末も維持しているということです。



ラモント図書館

ラモント図書館

<http://www.fas.harvard.edu/lamont/>
1999年に開館50周年を迎えた全米最古の学部学生用図書館です。ラモント図書館の開館により、学部学生用図書館というものが全米の各大

学に拡がっていったということです。先般の不況下で多くの大学が学部学生用図書館を閉鎖しましたが、ハーバード大学はこれを維持しました。ここでは、主に利用者教育を中心として館長のHeather Coleさんにご説明いただきました。

ハーバード大学の図書館のシステムはHOLLIS (Harvard OnLine Library Information System) と言います。ハーバードの学生にとってはHOLLISを使いこなすことが肝要で、そのインストラクションをこの図書館で担当しています。インストラクションは、そのための専用の部屋が設けられており、2名のスタッフが12名の受講者に対して行います。今後は受講者を14、5名まで増やしたいということです。また、受講者は学生だけでなくHOLLISに不慣れな図書館員やあらためて勉強したい図書館員もいるそうです。

図書館員が授業をするということはありませんが、と伺ったところ、やっていないというお答えでした。それから、図書館に対して、授業に関連した教員からのリクエストはいろいろあるが、すべてに応えるのはとても無理だというお話もされました。

レファレンスコーナーでは、学生が入れ替わり立ち替わりスタッフに何事か質問していました。端末を見たところ、デスクトップからいっさいのアイコンが消されていて、Netscape以外は使えないようになっていました。WindowsNTによって運用されているようでした。mailをしたい人はロビーの端末を使いなさい、という掲示がしてあったので覗いてみると、グリーンのiMacが4台置いてあり、やはり御多分に洩れず大盛況でした。また、検索結果をプリントアウトしている学生がいましたが、自分のIDカードをプリンターに差し込んで使っていました。料金は口座引落にでもなっているのでしょうか。日常、図書館端末に対するいたずらや無駄なプリントの山に心を痛めている私としては、非常に考えさせられる光景でした。また、リザーブコレクションというものを初めて見ました。サーキュレーションデスクの後ろにはそれ用の立派な本棚がいくつもあって、たくさんの資料が収められていました。普通、日

本では指定図書などと呼ばれ、授業に関連のある必読資料を図書館が複数部数用意して学生に貸し出します。私が卒業した大学にも、現在の職場にも指定図書はないので、これほど大規模なものとは想像していませんでした。

この建物の最上階は、フロア全部が衛星放送、ビデオやオーディオの視聴、インターネットが楽しめるオープンルームのようになっていて、多くの学生で賑わっていました。一角には、語学研修のための部屋もあり、教員が予約をして使えるようになっていました。もっとも予約と言っても用紙が扉に貼り付けてあるだけで、要は早い者勝ちということのようです。

最初に述べたように、ラモント図書館は学部学生専用の図書館です。次にご紹介するワイドナー図書館のような研究図書館とは明らかに違うリラックスした雰囲気があります。その大きな理由は、おしゃべりが許されているからでしょう。学生達は、自由に議論したり談笑したりしていました。しかしそれは大声でなく、騒ぐということもなく、抑制の効いたものであると私には感じられました。何よりも携帯電話でしゃべっている学生を見ることはありませんでした。(滞米中、公共の場で携帯電話の雑音にいらさせられることはありませんでした。喫煙についても、また観劇中の会話等についても然りです。公共のマナー、エチケットに対する日本人の感覚はいかに幼稚だと思わざるを得ません。)



ワイドナー図書館

ワイドナー図書館

<http://hcl.harvard.edu/widener/>

世界最大の人文・社会科学分野の研究図書館の一つ(蔵書数約320万冊)で、1915年に開館しました。正式には、“The Harry Elkins

Widener Memorial Library” と言うようです。ハーバード大学を1907年に卒業したWidenerは、1912年、豪華客船タイタニックとともに短い生涯を閉じました。母のEleanorは、息子の意を酌んでこの図書館を寄付しました。館内には、Widener が使っていた書斎がそのままの形で維持されています。現在、大がかりな修築・修繕が行われていて、利用できないエリアがたくさんありました。彼の書斎も整理が始まっていて、残念ながら部屋の中に入って見ることはできませんでした。

この図書館の外観は、古代ギリシアの神殿のような巨大な柱が何本も立ち並ぶ壮麗な造りが特徴です。建物の中に一歩足を踏み入れると、あたかも20世紀初頭にタイムスリップしてしまっ

たかのような錯覚に陥ります。レファレンスルームを少しだけ歩きましたが、しわぶき一つ聞こえない厳粛な空間がそこにはありました。

立ち去り際に、入口の扉に貼ってある紙に目が止まりました。それには、「研究図書館の責任として、教官、学生、研究者の研究環境を守るため一般の方の見学はお断りします」という内容のことが数ヶ国語に訳されて書いてありました。館内の撮影も禁止されています。図書館という「場」がいかに大切であるか、そして、誰のために何のためにその場を守らなければいけないのか、この当たり前の、しかし当たり前すぎるゆえに見失いがちのことに、遠い異国であらためて気づかされる思いで、その文章を何度も読み返しました。

(ごとう けいた)

附属図書館資料紹介

「植物学・園芸学：文献・標本コレクション」 平成11年度全国共同利用図書資料（大型コレクション）

平成11年度全国共同利用図書資料（大型コレクション）として、「植物学・園芸学：文献・標本コレクションBotanical and horticultural collection. pt.1: Plant taxonomic literature collection」が附属図書館で購入されました。このコレクションには植物分類学に関する4,679点の基本参考文献が納められています。植物分類学者にとって重要でありながら入手困難で、日本の図書館にはどこも所蔵されておら

ず、植物分類学の研究を進める上で大きな支障をきたしていました。

文献は、大英博物館自然史部（British Museum, Natural History）の蔵書をもとにマイクロフィッシュ化されています。本コレクションが購入されたことにより、本学及び全国の植物学、園芸学の関連分野の研究者にとって学術・研究上の利便性が高まり、研究も飛躍的發展が見込まれます。

CD-ROM版PCI（欧米雑誌記事索引）

PCI (Periodicals Contents Index)CD-ROMが附属図書館で購入され、4月から利用に供しています。PCIは19世紀から1990年までの主要な人文・社会系雑誌3500誌の目次を網羅する唯一の欧米雑誌記事索引データベースです。今回、一挙にSeries IとIIすべてが購入されました。この中には、京都大学が所蔵していて歴史的に著名な雑誌、引用されることの非常に多い雑誌、英語圏以外で刊行され主要な索引誌に登場する

雑誌等が収録されています。

京都大学にとって、膨大な量を誇る、人文・社会科学系の各図書室が所蔵している雑誌の有意義な活用のための貴重なツールとなります。なお、PCIは電子図書館「学内向けサービス」のページからご利用になれます。

<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/lusr/gakunai.html#cdrom>

医学図書館の相互利用サービス

シリーズ「京都大学図書館巡り」

医学図書館閲覧掛 児 玉 優 子

医学図書館は医学部キャンパスの南端、附属病院の北隣にあります。おもな来館者は医学部・附属病院・関係部局(再生研など)の方ですが、ほかにも薬学部・農学部・人間環境学研究科・情報学研究科など、生命科学に関連する幅広い研究者の皆さまにご利用いただいています。

生命科学分野では雑誌論文が主な情報流通ルートです。十数年前は料金を気にしながらオンライン検索していたMEDLINE(医学文献のデータベース)がCD-ROMになり、さらにそれがCD-ROMサーバで全学に提供されるようになり、今ではインターネットで無料で提供されるものまで現れました(PubMed)。

気軽に文献検索できるようになると、読みたい文献が増えます。けれども一つの図書館で利用できる雑誌には限りがあります。それをカバーするのが、図書館の相互利用サービスです。学内の他の図書館・図書室をご紹介したり、学内にない場合は他大学図書館から複写物を送ってもらったりします。

医学図書館においても、相互利用は業務の大きな位置を占めています。昨年1999年度の取り扱い件数は以下のとおりです。

学外への複写依頼 6,578件
(うち海外手配 64件)

学外からの複写受付 16,900件

平均すると毎日約30件を学外に手配し、約60件の複写物を学外へお送りしていることになります。毎日大量の郵便物が全国を飛び交っています。

医学図書館を通じて学外手配できるのは、医学部・附属病院・関連部局の方です。申込書を書いていただくと、担当者がまずその資料を所蔵している図書館を探し、必要な文献を指定して複写を依頼します。全国の大学図書館が接続し

ているNACSIS-ILLというオンラインシステムを利用しています。平均3~4日、ほとんどの文献は一週間以内に入手できます。大至急の場合はファクシミリで送ってもらうこともあります。

一方、学外からの申込みは、大学図書館・病院図書室・開業医・医薬品メーカーなど多様です。NACSIS-ILLシステムやファクシミリで、様々な資料の複写申込みが飛び込んできます。本棚から一冊一冊探してきてコピーをとり、料金を計算して封筒に入れ、郵送します。

学内でも宇治・熊取・犬山などの遠隔地からは、学内ILLの複写申込みがあります。

最近の悩みは、インターネットによって情報の流れが速く、また、広がったことです。例えば雑誌最新号の情報は、印刷して送られてくるよりずっと速く流れます。学外手配しても、どの図書館にも届いていないということがしばしばあります。また、NACSIS-Webcatで所蔵を調べた学外の方が複写を希望されるケースもあります。逆に、今までは所蔵している図書館が見つからなくて入手できなかった文献も、国内外の様々な図書館や学協会のホームページを通じて見つけれられるようになりました。

医学図書館は「日本医学図書館協会」という医学系図書館ネットワークにも加盟しています。日本医学図書館協会では70年以上前から相互利用が活発に行われています。特に医学情報は、患者さんの命に関わるものでもあるので、迅速な資料提供が心がけられています。

ひとつの図書館は、図書館ネットワークへの入り口です。探している資料が見つからないとき、どうぞお気軽にご相談ください。

(こだま ゆうこ)

蔵書統計（平成12年3月31日現在）

部 局	受入冊数		蔵書冊数		入力冊数	
	和 書	洋 書	和 書	洋 書	和 書	洋 書
附属図書館	21,627	3,402	551,501	269,816	209,248	62,689
総合人間学部	3,494	2,662	313,472	270,289	45,666	69,198
文学部	10,690	8,495	500,173	335,166	29,074	70,303
教育学部	1,852	1,210	75,838	57,400	26,958	17,286
高等教育教授システム開発センター	241	93	871	659	0	0
法学部	3,493	5,928	246,009	335,415	32,442	41,769
経済学部	4,344	3,233	225,515	216,447	27,630	39,523
理学部	641	1,180	47,239	199,905	17,086	47,290
医学部	783	2,008	49,579	137,020	6,326	4,286
薬学部	140	955	11,765	32,136	2,795	2,131
工学部	1,797	1,885	130,533	205,982	31,570	25,801
エネルギー科学研究科	228	91	2,006	1,384	1,092	437
情報学研究科	1,032	1,034	12,122	55,627	4,200	13,441
農学部	1,313	960	167,128	143,389	16,215	7,810
農学部附属農場	0	0	586	113	6	32
農学部附属演習林	107	113	10,297	3,319	2,084	730
人文科学研究所	4,237	1,441	433,256	71,988	14,952	16,005
再生医科学研究所	0	0	1,825	5,639	161	264
化学研究所	33	181	7,009	31,970	1,461	4,332
エネルギー理工学研究所	0	266	4,516	15,341	807	1,606
木質科学研究所	3	61	4,970	5,135	339	500
食糧科学研究所	6	201	3,183	10,657	18	167
防災研究所	12	176	8,026	25,562	970	5,963
ウイルス研究所	0	44	484	10,035	113	1,156
基礎物理学研究所	114	1,748	7,867	64,656	2,646	22,485
経済研究所	83	327	40,337	33,206	3,966	9,816
原子炉実験所	33	621	12,282	31,964	1,207	1,767
数理解析研究所	108	763	6,445	68,968	4,062	30,079
霊長類研究所	170	496	5,895	13,150	4,533	4,181
東南アジア研究センター	1,637	6,007	21,907	75,338	9,625	23,877
大型計算機センター	60	243	4,824	11,397	2,657	5,027
総合情報メディアセンター	0	0	226	552	3	163
環境保全センター	1	69	617	1,063	248	1,050
放射線生物研究センター	0	0	405	1,816	213	116
生体医療工学研究センター	0	0	0	0	0	0
超高層電波研究センター	0	38	509	2,606	1	156
医療技術短期大学部	337	60	24,040	5,622	3,920	1,348
保健診療所	0	0	0	0	0	0
経理部	0	0	558	0	0	0
施設部	0	0	789	69	0	0
学生部	0	0	295	166	0	0
生態学研究センター	69	41	1,846	4,493	336	1,042
人間・環境学研究科	410	551	4,816	10,630	4,043	8,640
アジア・アフリカ地域研究研究科	301	20,522	6,063	32,878	3,693	24,274
合 計	59,696	67,105	2,947,684	2,798,968	512,366	566,740
和 洋 合 計	126,801		5,746,652		1,079,106	

教官寄贈図書一覧（平成12年4月～7月）

身 分	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
教授	若谷誠宏	Plasma Physics	springer	1990
教授	檜山為次郎	Organofluorine Compounds	springer	2000
教授	吉川恒夫	Foundations of Robotics	MIT Press	1990
総長	長尾 真	時の美学	京都市立芸術大学	2000
総長	長尾 真	環境情報の統合化	京大大学院工学研究 科環境工学専攻	2000
総長	長尾 真	第 34 回日本水環境学会年会講演集	(社)日本水環境学会	2000
助教授	東郷雄二	東郷式文化系必修研究生活術	夏目書房	2000
教授	上林彌彦	Database Applications in Non- Traditional Environments '99	IEEE	2000
教授	松沢哲郎	Chimpanzee Mind 1995-2000		2000
教授	小川 侃	二十世紀の洗礼者 T.S. エリオット	溪水社	1999
教授	奥西一夫	シンポジウム山地斜面、河川水系、海岸を通 じての物資移動の環境・防災的意義報告書	京大防災研究所	2000
教授	奥西一夫	土壌凍結が斜面の安定性に与える影響	京大防災研究所	2000
総長	長尾 真	岩崎文庫貴重書書誌解題	東洋文庫	2000
総長	長尾 真	モリソン 2 世文庫目録	東洋文庫	2000
総長	長尾 真	宋史選挙志譯註（三）	東洋文庫	2000
総長	長尾 真	国際シンポジウム報告集 11（A,B）	日文研	1999
教授	村瀬哲司	アジア安定通貨圏	勁草書房	2000
名誉教授	荒井 健	長物志 1, 2, 3	平凡社	1999
教授	狭間直樹	上海孫中山故居蔵書目録	汲古書院	1993
教授	狭間直樹	孫文与 [カキョウ]	(財)孫中山記念会	1996
教授	狭間直樹	孫文と架橋	汲古書院	1999
教授	狭間直樹	孫文とアジア	汲古書院	1993
助教授	丸橋良雄	英国喜劇論集	あぼろん社	1999
非常勤講師	高山秀三	クライスト / 愛の構造	松籟社	1998
助教授	金子周司	ライフサイエンス必須英単語	羊土社	2000
	山田孝子	An Anthropology of Animism and Shamanism	Akademai Kiado	1999
教授	相良直彦	癒しの里・洛北岩倉	岩倉の歴史と文化を 学ぶ会	2000
教授	石原 潤	成都市とその近郊農村の変貌	京大大学院文学研究 科地理学教室	2000

..... 図書館の動き

第47回国立大学図書館協議会総会

平成12年6月28日、29日の両日、金沢市において全国の国立大学附属図書館長、事務部課長約300余名が出席して開催された。全体会議に続き、二つの分科会が開かれ、第1分科会（予算・人事）では、教官当たり積算校費の改善に伴う図書館の財政基盤の確立方策、専門職員の配置、資料共同利用センター構想の具体化について、また、第2分科会（運営・サービス）では、大学情報と図書館の役割、ネットワークの不正使用問題、図書館における教育支援サービスのあり方、遡及入力、ドキュメント・デリバリーシステムの推進方策について熱心な討議が行われた。また、研究集会においては、図書館職員による7件の発表が行われた。全体会議では、文部省所管事項説明のほか、外国雑誌の高騰など学術雑誌問題についての意見交換、文部大臣への要望事項、本年度事業計画等、分科会の取りまとめ等について協議が行われた。

共通閲覧証が廃止になりました

標記第47回総会において共通閲覧証の廃止が承認され、関連する利用実施要項が改正されました。これにより、大学院生を含む研究者が他の国立大学図書館との相互利用に際しては、従来の共通閲覧証の提示から、学生証、身分証明書の提示へと変更になります。

全学共通科目「情報探索入門」に協議会賞！

標記47回総会で、京都大学に国立大学図書館協議会賞が授与されました。

平成12年度は東京大学附属図書館CD版利用案内作成ワーキンググループの「ビデオCDインターネット版図書館利用案内『まると図書館』作成活動」と京都大学附属図書館「情報探索入門」演習支援ワーキンググループの「京都大学附属図書館における利用者教育『情報探索・情報収集』の活動」が何れも図書館活動における功績として与えられました。

今回受賞した「利用者教育の活動」は平成10年4月から開講された全学共通科目「情報探索入門」が対象となっています。全国の国立大学ではあまり例のない本格的な図書館利用者教育は好評の中、今年で3回目を迎えています。教官と職員が共同して行う講義は情報活用について学生に教育する必要性と職員自身のレベルアップ、図書館の存在価値を高めるために実施されたものです。情報活用に関する各講義に対応して全学の図書館職員15名が参加して、演習を担当する形の図書館活動が今回、功績となって受賞につながったものと言えます。

国立大学図書館協議会賞は東京大学附属図書館長であった岸本英夫博士の記念基金により設けられた「岸本賞」として、名古屋大学の「ロシア・ソヴィエト人名辞典訳編原稿」が昭和41年（1966）に与えられたのが始まりです。京都大学は、昭和49年（1974）に「京都大学数理解析研究所におけるWIC活動」が参加した図書室職員（代表：板東瑞昭氏）に与えられました。また昭和60年（1985）に「京大『大惣本』購入事情の考察」が附属図書館の廣庭基介氏に与えられています。京都大学にとっては、今回が3回目の受賞にあたります。

7月25日には附属図書館で講義を担当された先生方と演習を担当した職員を囲み総長をはじめ、全学の図書系職員が集まり祝賀会が行われました。

連歌の世界

電子図書館で公開された貴重書

「2000年京都電子図書館国際会議」記念展示会

開催期間 : 平成12年11月1日(水)~11月17日(金)3日休館)
開催時間 : 午前10時~午後5時(入場は4時半まで)
会 場 : 京都大学附属図書館3階展示ホール 入場無料

目 次

豊かな人間社会の構築に貢献することを目指して	1
附属図書館宇治分館の設置にあたって	3
2000年京都電子図書館国際会議について	4
外国雑誌目次データベース(SwetScan)を有効に使いませんか!	6
京都大学図書館百年 京大草創期の司書たち	9
アメリカ大学図書館の旅 ハーバード大学	12
附属図書館資料紹介	15
医学図書館の相互利用サービス シリーズ「京都大学図書室巡り」	16
蔵書統計(平成12年3月31日現在)	17
教官寄贈図書一覧	18
図書館の動き	
第47回国大図協総会、共通閲覧証廃止、「情報探索入門」に協議会賞	19

編集後記

6月末から7月にかけて、図書事務改善検討部会、管理業務検討ワーキング、外国雑誌の重複調整、電子図書館国際会議の準備、中国書の入力、地域目録講習会、それに会計監査、商議会、研究開発室会議などがありました。こんな中で全集ものが網羅された「片田文庫」14,000冊の整理が完了し、2階の開架室にデビューします。また、先生方と職員の共同で行われた「全学共通科目・情報探索入門」に国立大学図書館協議会賞が贈られました。ちょっと息切れ気味の職員一同、久しぶりに充実感を味わっている次第です。